

六

花



12

2023

りっかはいくかい

十一月十八日

山田 六甲

霜月は十八日の訃報かな

靈山へ旅立たれしと霜の菊

幻蝶の水にゆらゆら後の月

遅くまで起きて逆転酒を挙ぐ

太白や月一舟に母もなし

泣き虫ぞ月の夜汽車は遠汽笛

逆転は男の美学秋深む

手に入れるべからぬがよき月下香

漕ぎ出でて岸振り向くなそぞろ寒

鶉の葛なだれこむ一之谷

はたはたの湯上げ海坂藩しのぶ

海坂は江戸から百里雁の月

立冬や明日の空は崩れさう

十月晦日赤松有馬の守破天龍正義忌

満月や人も毛ものも狂ふらし

立冬の郵便でくるおけさ柿

立冬や蜘蛛のとびちやんまだ元気

渋抜いてあると届きぬおけさ柿

子規の絵の一筆箋や秋灯下

冬の日の指しこんで来し石舞台

二合半こなからの口尖らせて夜寒かな

のどぐろとはたはた煮付け八海山

丹沢の栗買うてきて剥きはじむ

野点かな茶巾絞りを頂いて

キャンベルは昭和のはなし葡萄寺

チエックイン松山月の湯舟かな

大内宿

太葱を一本のみの走り蕎麦

もういちど奥へ来いよと月の山

芒野や鷗野讚良の姫御子と

朝夢は騒音だらけ紅葉散る

黍粟を正月餅に置いておく

冬月の水に宿れば心澄む

月のあれこれ

「百科事典」に、弦月の名は、輝いている半円部分を、弓とそれに張った弦になぞらえたもので、弓張月（ゆみはりつき）、弓張（ゆみはり）ともいう。弦月とだけ書いて「ゆみはり」と訓読みすることもある。他に、恒月（こうげつ）、破月（はげつ）、片割月（かたわれつき）なども。これらは基本的に、月にまつわる他の語と同様、秋の季語。しかし冬の月も趣があり寒々と尖る月も棄てがたい。

虚しさに戯け出でたり吾亦紅 谷口一献

吾亦紅は、どうみても目立ちたがりやではない。その極みの花はおどけてあのような味な咲きかたをしたのではないか、と悲哀を慮ったか。商いの行き詰まりの末、死を覚悟した商人が最期に、鼠眞の芸妓たちと「かっぱれ」を踊り狂う場面をふと思いだす。戯けはたわけとも読み、派手にきらびやかに過ごした反動で茶屋に来て最期の夜を散財し、にぎやかに騒ぐ。その時の踊りが「かっぱれ」である。たわけの語源は子どものために田を細かく分けて値打ちをなくす馬鹿げた行為との語源も。諸説あるが…。

六

彼の世よりこぼれて一人昼寝覚 巽恵子

1
 昼寝から覚めたら私は彼の世（死んでから行くという世界、冥途、めいど、来世）からこぼれ落ちたのだと知って愕然とした、というのだ。もどったと書うのが文法的には正しいのだろうか、それを「こぼれて」と言ったのが文芸の真である。こぼれは自嘲のおちこぼれに通うか。

六

かまつか ◎ 笹村 政子

流星のよぎりし空をまぶしめり
星飛んでまばたき一つ返しけり
月白や十戸に足らぬ父の里
ふるさとの小さき色町ちちる鳴く
色鳥のみんなおしやべり雨催ひ
色鳥や少し派手めな帽子買ひ
風あなを猫の通へる乱れ萩
かまつかの色を違へて燃えにけり
半刻を待たされてゐる鰯雲
亡き夫にわが歳重ね鰯雲

本当の赤 ◎ 志方 章子

赤といふ色にはあらず赤のまま
色づきの下より上る実南天
秋灯や今や時間をもて余し
この赤が本当の赤カンナ咲く
淋しさを言ふ人もなし花芒
すいつちよと鳴くは夢かな現かな
首痛くなるほど見上げ鰯雲
きらめきの目に返りくる秋の海
桔梗きぢやうの風呂敷ほどくやうにかな
新豆腐香りとともに掬ひけり

色鳥や少し派手めな帽子買ひ

色鳥は秋に渡ってくる美しい小鳥のことをいう。作者は色鳥に刺激されて、派手目な帽子を買おうと刺激され私もお洒落をしてみようと女性らしい感情が芽生えた。高齢になるほどお洒落をするのがよいと言われ、特にピンク色の服装がよいとされている。猛暑も過ぎ去って少しはお化粧やお洒落をしてみようという気分にもなる季節。「かまつか」は枕草子の『草の花64段』に、「かまつか」の呼称で記載。葉鶏頭が実が美しく盆栽などにも仕立てられるものか。また鎌の柄に使われたことから、鎌柄（カマツカ）とも書く。

牛の鼻輪をこの木で作ったことから、別名ウシゴロシと呼ばれている。生活の中で身近に使われてきた〔百科辞典〕。掲句の場合は葉鶏頭であろう。『星跳ぶ』の作品も面白い。

この赤が本当の赤カンナ咲く 志方章子

植物で見る赤はどうも本物ではないと常々思っていたが、燃えるようなカンナの色を見て、これこそ私の望む赤色であると感銘。だが本当の赤とはどういうものか表現できるとよいと思う。もう少し。

「すいつちよと鳴くは夢かな現かな」はくつわ虫だと思っが、年齢によっては周波数によって聞こえないこともあるとか。寝について聞こえたか聞こえないかはっきりしない状態で夢なのか現実なのかと疑っている。そういう曖昧な秋のひとつのことを詠んだ。掲句の「かな」は疑問の「なか」で、感動した「かな」ではなからう。桔梗の句は風呂敷を解くような咲きかたしたよという表現の面白味もある。「新豆腐」の句も趣がある。

吾亦紅 ◎ 升田ヤス子

咲きてもう暮れ方の色吾亦紅
色かへぬ松や兵舎の基礎遺し

娘

藍浴衣着て更年期かこちをり
九月かな名画の野辺に吾を置き
かなぶんの襲撃九月四日の夜
ブルームーン豊旗雲に囲まれて
鮎落ちる蛇籠に沿うてしなやかに
落鮎の串刺し二本築料理
落鮎や父の使ひし舟遺る

提灯屋 ◎ 廣畑育子

浜木綿の辻に缶蹴りせしあの日
浜木綿の花のもつれの激しかり
提灯屋提灯屋を描く
祭提灯巧みに使ふ竹コンパス
筆の字に気骨ありたる提灯屋
駄菓子屋の路地に桃色さるすべり
風爽か白雲の立つ坂の上
処暑なるや蛙の声の聞こえ来ず
雨激し手に手に傘の地藏盆

熱いり立つ爆音バイク八月尽

石畳濡れて八朔雛まつり

咲きてもう暮れ方の色吾亦紅 升田ヤス子
まことに地味な吾亦紅の特質を言い当てた。吾亦紅のよろしさは、主役にならない脇役のよろしさ。茶席の花としても好まれる。掲句は咲いたその時から暮れ方の地味な色であると感じた。お嬢さんの藍浴衣の句、娘がもう更年期云々という年齢になったよ、とある種の感慨でもある。前書きに「娘」とあるが、今の世には歓迎されないかもしれないが名前を書いてもよいと思う。ちなみに「かこつ」とは心が満たされず、不平を言う。ぐちをこぼす。などの意味もある。夢風撰にしたいがベテランであるから新しい人を育てる意味で譲ってもらった。

石畳濡れて八朔雛まつり 廣畑育子

八朔とは旧暦八月一日のこと。雛まつりがなぜ三月でないのかというと、昔、室山城が龍野城主に急襲され、婚礼の夜に花嫁が命を落とした。花嫁の死を悼んだ住民が、ひな祭りを半年延期したのが始まりとされる。(室津のホームページ)その花嫁を悼んで室津に降る涙の雨に濡れた石畳であろうか、という作品。「筆の字」の作品。祭提灯に入る文字に長年伝統を守ってきた職人の気骨ある筆遣いの感銘を受けている。育子は今月から六花主要同人として貢献して貰うことになった。

白南風 ◎ 永田万年青

蝶とんぼ葦の葉先に揺れもせず
夏空や櫓の横に雲ひとつ
おほかたは看護師の書く星祭
七夕や健脚願ふりハビリ室
てつぺんに四字の筆書き星祭
白南風や汐の香りのセンター街
白南風や釣り船の水脈長かりき
白南風や湾を一望せし木椅子
外に出て危険な暑さに引き返す
橋の上暫し涼風受けにけり

酒吞(ささの)ゆ

秋の蚊 ◎ 谷口 一献

妖しげな貌して孫の笹飾
野分来るまた直ぐ後に次が来る
野分立ち鳥居の丹色剥がしけり
真つ白な海月は無色海青し
瞳より先ず鼻で識る金木屋
秋の蚊をそつと優しく殺しけり
秋花火済みて淡墨色の空
暑気の止む気配全然今日は処暑
群で来て群で翔び立つ小鳥かな
真ん丸の名月夜を金色に

白南風や汐の香りのセンター街

白南風(しらはえ)というのは梅雨明け近くの明るい南風で、ときに風景が白くかすんで見えることも。そのころには港に近い神戸一番の繁華街のセンター街に海風が吹いてくる。というのだ。リハビリに通う日々の中で病院には七夕飾りがあって願いの短冊が患者や看護師によって願い事が書かれて吊るされる。が、この病院の飾りにはほとんどが病人に代わって看護師が書いている。この句眼目はほとんど川柳に近い材料。俳人は短冊を題材に句を詠めばよい句が出来ると思うのだが。もつと粘り強く取り組んでみるのも折角の機会だから良いと思う。白南風や湾を一望せしの句をもつと踏み込んで詠むとよい。橋の上の句はしばし涼風を楽しんだという句は素直な心地を詠んでいるので好感が持てる。

秋の蚊をそつと優しく殺しけり

秋の蚊は弱っているようで結構刺されると痛い。刺されるといふより噛まれた感じがする。秋の、とあるから残りわずかな蚊の命で哀れただけで此畜生と思うほどに痒い。だから優しく殺したのであろう。007の映画のタイトルのように「優しく殺しで」などというのが怖い。また「暑気の止む気配」などない、という心情はよくわかる。昔は暑くてたまらないときには灸を据えてウーっと耐えて見たものだけれど。処暑というのは処暑の「処」には止まるという意味があり、暑さがおさまる頃なのだが一向にそんな気配がないよと言っている。季節はもう少し後になる。暑さ寒さも彼岸まで。しかしもう彼岸は越えた。「群で来て」といふのはいかにも小鳥らしい。

かなぶん ◎ 田尻 りさ

金蚤の追詰めらるる階段下
 今もなを蝉を掴みぬる婆
 そういう時代だつたよ原爆ドーム
 肩口を舐めて確かむ汗の味
 次の世はいらぬ微かに秋の風
 蟋蟀の鳴きははじめたる窓を開く
 白南風や最期の言葉「おとうさん」
 ハンモックに囚われて子の躑きぬる
 流行歌は思ひ出の目次さるすべり
 バイバイと蝶と蝉とを放ちけり

つつじが丘

白南風 ◎ 延川五十昭

白南風やペットボトルの中華文字
 白南風や楠の葉裏の吹き返し
 白南風や潮目の変る橋の上
 しらはえや骨董市の伎楽面
 紫電改形は残り稲の秋
 雲の湧く葡萄ひと房峠茶屋
 店いつぱい油彩画ならべ秋日中
 採りたての無花果ジャムの朝餉かな
 ナツメロに合す口笛秋深し
 柿たわわ特攻隊の遺品館

金蚤の追い詰めらるる階段下
 金蚤が家に飛び込んで来て家族で大騒ぎ。あちこち飛び回って階段下でやっと捕まえたのだ。ところでかなぶんのフォント文字がワードにないから一太郎から取り込んだ。もしかしたらメールで印刷に送ると文字化けしているかも。但し下六になるから何とか工夫が必要。また最近では照明に昔のように虫の好む波長が少ないから民家近くに夜飛んでくる火取り虫などあまり見かけない。味気ないと言えば味気ない。ハンモックに囚われて子供がもがいているというのも面白い。もがくまえにこけて落ちるとおもうのだが、句のような場面もあるだろう。

「蟋蟀の鳴きははじめたる」の句、窓を開けてはつきりと蟋蟀の声を聴きたいと思うのが風雅でもある。

白南風やペットボトルの中華文字

ペットボトルが海に流れついて、その瓶をみたら中華の文字が印字してあって外国から流れ着いたと分かる。潮の流れが日本へ向かって来るからだ。だがある国は日本から処理水を汚染水として影響があるとボイコットしているというが果たしてどうか。北朝鮮、中国へは日本から潮の流れでいえば流れていかない。その逆は大いに向こうから日本へは流れてくる。

骨董市は関西では京都の東寺が有名。「伎楽面」とは古代日本で演じられた仮面舞踊劇である伎楽に用いられた仮面。世界最古に属する面としてその歴史的要義は大き

いと百科事典に。彼は歴史的美術的なものに興味を持ち造詣も深い。柿たわわの句、特攻隊の遺品館の庭に生った柿の実に目を付けて詠んだ。この柿ももしかしたら戦時中に成っていたかどうか。

野分して ◎ 延川篁子

野分して大女郎蜘蛛身じろがず
白南風や海の男で在りし頃
白南風や十四代目の墓仕まひ
白南風や亡き人からの着信音
白南風や根の国こそ暑さあり
白南風や南の島を焼き尽し
鶉野の道を良く知りかたつむり
夏の野や一本だけの滑走路
飛び立てる若者の遺書夏の雲
母想ふ特攻の子や雲の峰

須磨の奥抄

外人墓地 ◎ 草場つくし

七夕や願ひは風に見え隠れ
七夕や逝きし姉へのメッセージ
七夕やお迎へあれと太き字で
朝霧の小さきひかりを踏まんとす
水澄むや逆さ櫓の壁白く
海のぞむ外人墓地に朝の露
コスモスや反抗期なる子の部屋に
爽籟や斑鳩の寺目の前に
秋空に認知なんぞやケセラセラ
小鳥くる斑鳩寺の昼下り

野分して大女郎蜘蛛身じろがず

女郎蜘蛛の貴祿。蜘蛛とはいえ、大人でもたじろぐ昆虫。と書いたがよく調べてみると「蜘蛛の巣を組む虫」または「黒い」「隠（ごもり）」から由来するらしい。クモは中国語で足長蜘蛛を表す「喜母」から由来するという説もあったが、今は否定されている。語源は「蜘蛛の組む虫」または、黒い隠（ごもり）から由来する。国語語源辞典」という。この句「野分の最中に」とでも言おうか。女郎蜘蛛は怖い。因みにわが家では蜘蛛君と読んで机の上で遊んでいるので可愛がっている。物静かで可愛いのである。蜘蛛を逆さに呼んだらもく（黙）であるし。夢風撰候補。

海のぞむ外人墓地に朝の露

いつから外国人を外人と呼ばなくなったのか知らないが、避暑地で有名な軽井沢で昔から住む外国人は「私たち外人は」と言っている。だから外人墓地は今でも外人墓地だと思っ。情緒があるから。神戸の外人墓地は今は何というのだろう。調べてないがきっと修法が原の神戸外国人墓地というのだろう。その墓地は紅葉がひどく美しい。

朝霧の句も写生眼が光る。朝露に宿した小さな光に行動を起こす理由が何なのだろうと想像が広がる。爽籟の斑鳩寺とは播州の斑鳩寺でホームページによると「斑鳩寺は姫路市とたつの市にはさまれた揖保郡太子町に位置し、この地は法隆寺の荘園「鶴荘（いかるがのしょう）」があり、その中心に荘園経営の核的存在として、政所とともに斑鳩寺が建立されたとある。聖徳太子の荘園だったといわれ縁が深い。その寺に小鳥が来たというのである。

「小鳥来る」は渡り鳥のやってくる秋の季題。

流燈 ◎ 江見 巖

夕端居顔の縦皺ふえにけり
 裸子の底を蹴り上ぐ地球より
 向日葵やカーブを投げる球覚え
 睡蓮や色のいろいろ万華鏡
 鬼灯や男にはなき赤き頬
 人につき風船葛裁判所
 カメラマンカメラの後ろ蓮の花
 仏壇の鬼灯一つ赤くなり
 ラベンダー一本つつの恋を持つ
 夜学生一人減りたる明かりかな

箕面抄

出の悪きペン ◎ 出口 誠

出の悪きペンにいらだつ秋の朝
 影の中涼しさ想ふ残暑かな
 秋の昼息子がおかず残しけり
 好物のほずのおかずよ秋の昼
 傘持ちて秋の嵐に濡れにけり
 台風にズボン濡らして歩きゆく
 台風が木を踊らせてをりにけり
 台風が木々をあふりてをりにけり
 台風が木々をなぶりてをりにけり
 題目で一句ものにし秋の宵

向日葵やカーブを投げる球覚え
 故赤松君に「台風は魔球を覚え新カーブ」という句があった。それは灘中学の試験問題になったが、そういう句であろう。向日葵の俯いた姿から来る連想か。が今はカーブぐらいでは打たれる。速球投手は打者の目の前で曲がるのだが、揺れながら曲がるので怖い。

同時句、「ラベンダー」は初夏に咲く花で香りのよい花。北海道の富良野が有名だが、まだはつきりと歳時記には載ってなく、一部の歳時記には載っているかもしれない。句いはすでに人がよく知っている。ラベンダーは、疲れを癒し、心地よい眠りができるし、精神的なストレスを和らげて緊張をほぐしてくれ、不安や緊張で眠れないときやイライラしているときに飲むとよく、気分を落ち着かせリラックスさせる効果がある（百科事典）という。一本ずつの恋というのは虫の交配を待っているという意図かも。夜学生の句は秋で、普段でも少ない生徒がまた一人減って寂しさが増した、という句。

出の悪きペンにいらだつ秋の朝

ペンとはボールペンであろう。少し涼しくなつてインクが固くなつて出にくいのか、残り少なくなつて出にくいのか分らないが、さつと手にもつて書き出しが悪くなつたのであろう。それにいらいらしているのだ。爽やかな秋の朝であるのに不幸なことである。「秋の昼」の句、息子がおかずを残したことが気になつている。というのも事情があつて、おかずを作ったのは作者本人であろう。どうして残したのかあれこれ気になる。題目での句。題目を挙げているうちに一句思いついた、というより一句賜つたのであろう。句は受動的に授かったという考えに賛成。